

フーベルト・ハイッス駐日オーストリア共和国大使のことば

一八六九年に、オーストリア^Ⅱハンガリー帝国と日本の間で、修好通商航海条約が締結され、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世より明治天皇に、ベーゼンドルフアー社のグランドピアノが贈られました。天皇が西洋音楽を耳にしたのはこれが初とされています。

それから一五〇年経った今日の日本では、オーストリアのクラシック音楽はとても愛されていますが、日本におけるクラシック音楽の黎明期に活躍した両国の音楽家たちのことはあまり知られていません。

ルドルフ・デイトトリヒは、一八八八年、東京藝術大学の前身である東京音楽学校に招聘されました。楽器演奏や音楽理論、作曲を指導しただけでなく、優秀な学生をヨーロッパで学ばせるように当時の文部大臣に進言したそうです。さらに、六年ほどの滞在中には日本音楽の研究にも取り組みました。

本書著者の平澤博子博士は、長年ウィーンでデイトトリヒ研究に携わってこられました。その長年の成果が、一五〇周年という記念の年に日本で出版されることは、オーストリア大使と

して大変に喜ばしいことです。

この本を通じ、日本の音楽愛好家の方々にも、ルドルフ・ディットリヒの功績を知っていただけたら幸いです。

駐日オーストリア共和国大使
フーベルト・ハイツス

澤和樹東京藝術大学長のことば

東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校は一八八七年（明治二〇年）に創立された。翌年、明治政府の招きにより、お雇い外国人としてやって来たのがルドルフ・デイトトリヒだった。ウィーンでアントン・ブルックナーの直弟子としてオルガン、作曲を学び、フリッツ・クライスラーの師としても知られるヨーゼフ・ヘルメスベルガーにヴァイオリンを学ぶなど、一九世紀後半における最高の音楽教育環境で優秀な成績を修めた彼が、創成期の東京音楽学校で六年間指導にあたり、日本人初の本格的ヴァイオリニスト・作曲家である幸田延や、妹の安藤幸をはじめ多くの優れた人材を育てた。

最近、私がドイツの名門音楽大学を訪問した折、当地の学長や副学長から「従来、ヨーロッパから日本に先生が教えに行き、日本人学生がヨーロッパで学ぶという一方向ではなく、今後は日本からも教授陣を招き、ヨーロッパの学生が日本で学ぶという双方向の交流を押し進めたい」という申し出を受けた。

デイトトリヒの蒔いた種が二三〇年を経た今、多くの日本人演奏家がヨーロッパの名門オー

ケストラで活躍し、国際コンクールでの日本人の優勝がもはやニュースにもならず、ヨーロッパからの留学生が日本の音楽大学でモーツァルトやベートーヴェンを学ぶことが夢物語ではなくなっている。まさに日本における西洋音楽教育の父ともいえるべきディットリヒの偉大な業績だが、我が国のみならず本国オーストリアでも忘れられた存在となりつつある。

日本とオーストリアの国交樹立一五〇周年の記念の年に、音楽学者の平澤博子博士の永年にわたる研究の成果が『ウィーンから日本へ 近代音楽の道を拓いた ルドルフ・ディットリヒ物語』の出版という形で実を結んだ。東京音楽学校創世記の音楽教育事情や、オーストリアに帰国後のディットリヒが伝えた日本の音楽や文化が、プッチーニの《蝶々夫人》などに与えた影響を知る貴重なドキュメンタリーであるだけでなく、彼自身が、ピンカートンを彷彿とさせる劇的な物語の主人公でもあり、読み物としても面白い。並々ならぬ情熱で出版を実現させた「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」事務局長の桑村益夫氏のご尽力にも心より敬意を表したい。

東京藝術大学学長

澤 和 樹

はじめに

今から一三〇余年前、明治政府にお雇い教師として招聘され、オーストリアからやってきたデットリヒという人の名を知ったのは、私がウィーン国立大学で音楽学を専攻していた時分で、かれこれ三〇余年ほど前のことでした。

日本とかかわりのあるテーマであれば学位取得にきつと容易なはずと、安易な期待から私は、「ルドルフ・デットリヒ／生涯と作品」を、博士課程の研究テーマに選択したのでした。

ところがこれがどうして大変な誤算であったことに気づかされるのに、そんなには要しませんでした。当時は、彼についての資料の在処がはつきりしなかったり、まとまってアーカイブになっているところがなく、資料を探索するために「犬も歩けば棒にあたる」を地でゆく連日が始まったのです。オーストリア、ドイツ、ポーランド、スイス、イギリス、チェコ、日本の公文書館、図書館、研究所、大学など諸機関のたくさんのご協力を請うことになりました。デットリヒに関しての論文はなんとか無事完成し、帰国後、四年半にわたり、音楽教育雑誌『音楽鑑賞教育』にシリーズとして連載させていただきました。

ウィーンに留学中の一九九六年、ディットリヒと日本人妻との間に生まれた息子の息子、即ち孫である俳優の故根上淳氏が、自らのルーツをたどるといふ、NHKの衛星放送番組（『我が心の旅』シリーズ）の、ウィーンでの収録のお手伝いをさせていただく機会を得ました。そして根上氏が帰国される時、「この祖父の写真を、ぜひあなたの出版時に役に立ててください」とくださったのがこの本の表紙をかざっている写真です。このささやかな一書の出版を一番待ち望まれていたのは故根上氏と、「まだ出版しないの？」と、たびたび発破をかけてくださった根上氏のご夫人・往年の大歌手ペギー葉山さん（二〇一七年ご逝去）のお二人ではないかと思われます。

今回の出版でつくづく思い知らされたことがあります。本書において、「近代黎明期の日本に西洋音楽の真髄を伝えた音楽家」としてのディットリヒの事績の全容を伝えようとすることは、あまりにも大それた試みであった、ということですが、学術文献を羅列させ、長々と論理づけて述べることは比較的たやすいことですが、それよりも本書では、現存する親族からの聴き取りも参考にして、ディットリヒの人物像をその足跡に沿ってコンパクトに著すことを試みました。

今年、二〇一九年は、教育・文化の面でも近代化を推し進めようとする極東の新興国・日本の地に渡り、西洋近代音楽の礎を築くことに貢献したディットリヒの没後一〇〇年。また修好

通商航海条約締結から一五〇年の記念すべき年に当たります。本書の刊行が、両国文化のさらなる交流の深化の一助となれば、これに過ぎる喜びはありません。

平澤 博子

フーベルト・ハイッス駐日オーストリア共和国大使のことば

3

澤和樹東京藝術大学長のことば

5

はじめに

7

第一章 ウィーン・修業時代

—— 綺羅星のごとき師・同輩とともに

織物都市ビアラから楽都ウィーンへ

18

師ブルックナーとの出会い

20

師の作曲を助けたデイトトリヒ

23

優れた師たちに恵まれて

25

オルガン部門で全審査員一致の一等賞

27

学校は出たものの——下積み時代の始まり

30

結婚、そして極東日本からの音楽教師招請

33

世紀末「オーストリアⅡハンガリー帝国」の事情

35

デイトトリヒの苦悩と決断

37

いざ日本へ!

40

第2章

東京音楽学校教師時代

——日本への愛と近代音楽創生への献身

- 新天地——東京音楽学校 46
- 教師魂を刺激した学校と生徒たち 49
- 先輩エツケルトの支え 52
- ルドルフ皇太子訃報の衝撃 54
- 《憲法発布の頌》を作曲・演奏 56
- 日本音楽會と鹿鳴館 58
- 妻ペリーネのデビュー 64
- 引っ越し 66
- 授業風景 68
- 薰陶を受けた幸田露伴の妹たち 74
- ウィーンで花開いた幸田延の才能 77
- ヨアヒムに師事した安藤幸 78
- 鹿鳴館で開かれた「日本音楽會」 82
- アドルフ・テルシヤクの来日 86
- 『音楽雑誌』のこと 91

帝国議会開院式祝賀記念音楽会 100

俗曲家の不平 103

妻ペリーネとの永遠の別れ 106

東京音楽学校の危機と伊澤校長の尽力 113

情熱の教育家・伊澤修二 116

ドイツトリヒに新局面開く 118

新たな心の支えと二つのピアノ行進曲 122

濃尾地震と慈善演奏会 128

温泉保養 131

クーデンホーフ・カレルギーの手紙 135

送別演奏会、そして帰国 139

第3章 晩年・再びのウィーン

—— 大オルガニスト、教育者として

変貌する世紀末のウィーン 150

「私はなんて美しい夢を見たんだろう！」

宮廷オルガニストに登用 153

大オルガニストへの道 157

超多忙な音楽家活動と経済的困窮 163

音楽関係諸団体の要職につき尽力 165

後継者たち——ゴラー、デイテー、シュッツ 169

ハプスブルク家の崩壊とドイツトリヒの最期 173

ドイツトリヒ年譜 180

ドイツトリヒ作品目録 187

参考文献一覧 193

調査・紹介諸機関——公文書館・図書館・研究所 199

「ルドルフ・ドイツトリヒ顕彰出版の会」のこと 桑村益夫 203

おわりに 207

索引 214

織物都市ビアラから楽都ウィーンへ

一八六一年四月二五日、フランツ・ルドルフ・アウグスト・ディットリヒ (Franz Rudolf August Dittrich) はオーストリア＝ハンガリー帝国ガリチア地方のビアラ (現ポーランド、クラクフの西南五〇キロ、チェコとスロバキアの国境近く) で、音楽教師兼カペルマイスターの父ヨハン・アントン・ユリウス (Johann Anton Julius 1825-1914)、職人家庭出身の母、ソフィー・ベアタ・フラセック (Sophie Beata Frassek 1826-?) の間に誕生しました (図1)。ディットリヒの両親が一八五七年結婚した町クロイツブルクも現在のポーランドに属します。祖父フランツ (Franz 1796-1858) は軍人で、オーボエ奏者、楽器製造業もしていたということです。ディットリヒにはヘドウィク・クレプス (Hedwig Krebs) という姉妹があったようです。来日当時、東京音楽学校に提出したディットリヒ自筆の英語の履歴書には、五歳でピアノ、七歳でヴァイオリン、九歳で教会音楽、一〇歳で音楽理論を学ぶ、とありますが、おそらく音楽教師であった父から、最初の手ほどきを受けたのでしょう。

Gültig nur zum Nachweis der arischen Abstammung.

Geburts- und Taufschein.

Eint. Taufmatrik. Band 11 58. Blatt 19 der

Frau Frieda August Dittreich

(geb. - legit. - unehel. Sohn - Erbin)

Dater: Julius Dittreich, Kapellmeister, Sohn des
Frau Lind der Adry geb. Malische

Mutter: Sophie Beata geb. Träsch, Tochter des Christian
And der Caroline geb. Kuen, evangel.

am 26. April 1861 in Biala geboren und

am 26. April 1861 nach röm.-katholischer Ritus getauft worden.

Pfarramt: Biala

am 21. August 1944 Hindrich

Stöße 60 1/2



Verf. von Urban Müller, Würzburg.

図1 デイトリヒの出生証明書

さて、今日のポーランドは中央ヨーロッパの東部に位置し、日本よりひとまわり小さな国ですが、一一一六世紀までは東ヨーロッパ最大の王国として繁栄。一八世紀にロシア、プロイセン、オーストリアの三国に分割され、突然、ヨーロッパ地上から消滅。先の大戦でも再び分割と、外国からの支配、干渉、差別を受けながらようやく国力を回復したという、希有な歴史をもった国です。こうした興亡流転の中で、デイトリヒが生まれた頃の一九世紀のビアラは、ハプスブルク家の管理下でありヨーロッパ有数の手工業、織物工業地域の一つに数えられていました。

大戦後、隣接市のビエルスコと合併されたビアラ(Bielsko-Biala、ビエルスコ・ビヤワ)は、現ポーランドの西南部に位置し(図2)、ドイツ語版ウィキペディアでは、デイトリヒを町の名士として、「オーストリアの音楽家、東京の音楽大学教師」と紹介しています。

ポーランドが東西隣接する諸大国から絶えず受けた大きな試練の一つとして、あのアウシュビッツ収容所の出

師ブルックナーとの出会い



図2 ビアラ-ウィーン関連地図

来事は、未来永劫払拭できない人類の痛恨極まりない歴史です。

一八七五年、一五歳のデイトトリヒは故郷ビアラの北西、ドイツ側に位置する当時は近代工業都市であり、最も古い都市の一つプレスラウの普通高等学校へ進学、三年後、卒業します。

こうしてデイトトリヒは、息子の音楽教育に非常に熱心で深い理解をもった両親の支えを得て、一八七八年一八歳で、音楽の都ウィーンへ武者修行へと旅発つたのです。いざ音楽の都、ウィーンへ！

ウィーンの住まいは四区にあるホイミュールガッセ2aでした。バロック建築の傑作の一つに数えられるカールス教会や、ウィーン市民の胃袋、食品市場ナツシュマルクトがあり、また、「音楽都市ウィーン」の名を確固たるものとした、ブラームス、グルック、J・シュトラウスⅡ、シューベルトなどが住まいとしたのも、このウィーン四区でした。若いデイトリヒは、学校にも近い音楽環境に恵まれたこの地で、活気に満ちた新生活をスタートしたのでした。

デイトリヒは、ウィーン・コンセルヴァトリウムの一八七八―七九年度に一年生として登録します。同校は、一八二二年に創設されたウィーン楽友協会の事業として傘下に置かれ、かのA・サリエリ(1750-1825)が一八一七年にまず声楽教室を、一八一九年にヴァイオリン一八三三年ピアノ、一八六八年オルガンと順次拡大、今日のウィーン国立音楽大学の礎石となった大変由緒深い学校です。デイトリヒがやってきた一八七八年頃の学校は、現ウィーン楽友協会にあり、音楽はもとより、演劇、ダンス、オペラなどの学科があり国際的な学校になっていました。

デイトリヒは後年、名オルガニストとして大成しますが、新学期の第一専攻はヴァイオリンで、J・ヘルメスベルガー(Joseph Hellmesberger 1855-1907)教授のクラスに登録しました。ヘルメスベルガー教授の父(J.Hellmesberger I 1828-93)は、宮廷楽長兼コンセルヴァトリウムの校長という名誉ある地位にあり、このヘルメスベルガー一家は、以後デイトリヒの人生に

大いにかかわってゆくことになるのです。

対位法はアントン・ブルックナー (Anton Bruckner 1825-96)、副科ピアノはウィルヘルム・シェンナー (Wilhelm Schenner 1839-1913) のクラスを選択。努力家だったディットリヒの成績はオーケストラ演習も含めて、「非常によろし」の「1」(日本では5にあたります)でした。一年生のディットリヒのクラスには、後にウィーン国立歌劇場指揮者兼ディレクター、ウィーンアカデミー教授、現サルツブルク音楽祭設立の事実上の創設者となるF・シャルク (Franz Schalk 1863-1931)、ブルックナー作品の名指揮者、今日のウィーン交響楽団の初代指揮者として活躍したF・レーヴェ (Ferdinand Löwe 1865-1925)、ウィーン音楽界の弦楽四重奏アンサンブルで、スターの座をしめていたヘルメスベルガー一家の末息子でチェリストのF・ヘルメスベルガー (Ferdinand Hellmesberger 1863-1940)、後のロゼー弦楽四重奏団創設者の一人であったチェリストE・ロゼー (Eduard Rose 1859-1943) など、錚々たる面々が同席していたのでした。

ところでディットリヒは真正正銘のおのぼりさんでした。音楽の都ウィーンでしつかり勉強し、故郷へ錦を飾ること、否それ以上に超一流の音楽家になることを夢見ていたのですから。そんなディットリヒは、ブルックナーにとって相当木訥ぼくとつ、不器用者にみえたようです。早速「ドイツのミヒェル」(生真面目で不器用者)と命名されることになったのでした。そのうちそん

なデイトトリヒが結構優秀な学生であることがわかると、ブルックナーは「聖人」と別名で呼ぶありさまです。当のデイトトリヒはというと、ちよつとこの命名拝領が自慢だったようです。

師の作曲を助けたデイトトリヒ

この頃のデイトトリヒと、師ブルックナーとの間に、こんなエピソードがあります。ウィーン・コンセルヴァトリウムでブルックナーの対位法クラスに在籍していたデイトトリヒは、その他に、プライベートレッスンにも通っておりました。謝礼は毎回三グルデン、日本円でおよそ三〇〇〇円くらいでしょうか。ところがひと月四回のレッスンがその日はちょうど第五週目にあたり、父からの送金が間に合わなくなったのです。それを聞いたブルックナーの興奮はさまざま、電光石化のごとく発せられた第一声たるや！

「君、言つとくがね、こんなこと、今後一切あつちやあ困るよ。レッスン受けたらすぐ払う、でなきや師弟の關係はこれまでだ！」というものでした。

二年次のブルックナーの対位法授業の思い出は、もつと格別のものでした。実はブルックナーの弦楽五重奏曲、へ長調、アダージョの楽章成立に、デイトトリヒも少なからずひと役買っ

ていたというお話です。

このアンサンブルの注文者は、ディットリヒのヴァイオリン教授ヘルメスベルガーの父親でウィーン音楽界の重鎮でもあるシニア・J・ヘルメスベルガーとあって、ブルックナーの張り切りようは大変なものでした。ある日のこと、いつものようにプライベートレッスンで、ブルックナーの家に行った時のことです。ブルックナーの頭はヘルメスベルガーのアンサンブル曲のことでいっぱい。とうとうディットリヒの前で緩徐楽章変ト長調かんじょの部分を弾いてみせたのです。ところがディットリヒのリアクションがあまりにも無愛想だったので、突然弾きやめ、こう言います。

ブルックナー「おや、君、こりゃ気に入らんようだね？」

ディットリヒ「先生、これは、そんなに特に良いとは……」

ブルックナー「それじゃ君、これはどうなのか言ってくれたまえ！」

このようにして二人の共同作業が始まりました。ブルックナーが即興で何度もオルガンを弾く。その度にディットリヒは駄目サインを送る……。そして、突然あのアダージョ部分が、数小節響いた時でした。ディットリヒはブルックナーの傍に脱兎の勢いで駆け寄り、「ストップ！ これ、これこそ本物です」と叫んだのです。

こうして、今日知られる第三楽章アダージョのテーマが誕生したのでした。^①

二年次の四月、こんなこともありました。ブルックナーの対位法授業で、ディットリヒがただ一人の受講生だった頃のことです。授業は、ブルックナーがピアノに向かい、ディットリヒは黒板に向かって行われました。課題は、フーガの第二主題の創作で、フーガの全楽曲構成はブルックナーが、第一主題もブルックナーによるものでした。ディットリヒが黒板に音符を書く、ブルックナーがそれをピアノで直し、転調指示を与える、という手順です。

「こりゃホントは禁止だが、きれいな響きだねえ。だが君、わしがこれを許したなんて、誰にも言っちゃダメだよ」

ブルックナーは、こうして本来禁止されている進行を、お目こぼししたのでした。後日、ディットリヒはこの自作品を数か所手直ししたものの、『前奏曲と二重フーガ 変ロ長調』の誕生は、やはり師ブルックナーがあつてこそと再認識、感服するのです。¹³

優れた師たちに恵まれて

卒業演奏試験のため、バッハのフーガ短調を練習している時でした。ちょうどその時、ボヘミア出身のオルガニスト、J・ラボー (Josef Labor 1842-1924) からオルガン操作に最も重

要な一つであるストップ技法についてアドヴァイスをもらうチャンスに恵まれたのです。その頃、ラポーは盲目の名オルガニストとして知られていました。けれど、気難しい師ブルックナーに、この事実を言えば、またどんなかんしゃく玉が破裂するかわかりません。そこで、ディットリヒはラポーのアドヴァイスを、日頃ブルックナーが敬意を表している校長ヘルメスベルガーの提言である、とその場をつくろい演奏してみせることに成功したのです。当のブルックナーといえば、ちつともそのことに気づかないばかりか、「さすがに宮廷楽長ヘルメスベルガー校長先生のアイディアは大したものだ。本物の芸術家だ」とご満悦だったのです。あんなに生真面目一方だったディットリヒは、卒業年次の頃にはこんなに要領よくなっていたのです。こうして、卒業試験は試験官満場一致で名譽の「優」を獲得したのでした。

一年次のディットリヒの学校生活に戻りましょう。

副科ピアノは、W・シェンナーであつたことは前述の通りですが、このシェンナーの生い立ちが、ディットリヒとそっくりであつたことに少しばかり触れておきます。シェンナーは、幼少の頃から教師であつた父から音楽の手ほどきを受け、実業学校を卒業、ウィーン・コンセルヴァトリウムに進学。卒業後は教会オルガニスト、そしてウィーン・コンセルヴァトリウムに進学。卒業後は教会オルガニスト、そしてウィーン・コンセルヴァトリウムの準備科と副科ピアノを担当、間もなくピアノ演奏科教授となつた人物です。

音楽家が初めの手ほどきを身近な人から受けてから音楽専門学校へ進むという傾向は、この

時代、一般的でした。ドイツトリヒの年近い先輩の、G・マーラー、H・ヴォルフや、同期のF・シャルク、F・ロヴェエ、F・ヘルメスベルガーもそれぞれ身近な人から手ほどきを受け、普通高校の経験を修めてからウィーン・コンセルヴァトリウムに入学しています。

ドイツトリヒのピアノの師シエンナーは、その上大変な努力家で、当時評判の大ピアニストA・ルビンシテイン (Anton Rubinstein 1829-94) のようなすばらしいタッチの持ち主だといわれておりました。シエンナーもブルックナー同様、校長ヘルメスベルガーと親交があり、ヘルメスベルガー弦楽四重奏団と度々共演しておりました。こうして多数の生徒から慕われ人望を集めていたシエンナーから、ドイツトリヒはたくさんのことを学ぶことができたのでした。一年次の成績は既述の通り「優」でしたが、ただ一つ、必修の合唱はなぜか欠席し成績欄に評価はありませんでした。その理由は二年次で判明するのですが。

オルガン部門で全審査員一致の一等賞

さてウィーン生活二年目で、ドイツトリヒは授業料免除という恩恵を受けることができました。またこの頃からメキメキと実力を発揮、学内演奏会に度々出演するようになります。第一

参考文献一覽

■事典類

- Baker's Biographical Dictionary of Musicians (New York 1984)
- Genealogisches Taschenbuch der Adelligen Häuser 14 (Brünn 1889)
- Handbuch des Allerhöchsten Hofes und des Hofstaats seiner k.k. Apostolischen
Majestät 一九一八 (Wien 1918)
- Lexikon für Theologie und Kirche, herausgegeben von Josef Höfer, Rom und Karl Rahner, Innsbruck 4 (Freiburg
1960)
- Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgemeine Enzyklopädie der Musik,
herausgegeben von Friedrich Blume. 17 Bde. (Kassel etc. 1949-1968)
- RISM (Répertoire international des Sources Musicales) Einzeldrucke vor 1800 (Kassel etc. 1971 ff)
- Universal-Handbuch der Musikliteratur, eingerichtet u. herausgegeben von Franz
Pazdirek (Wien o.J.)
- Wurzbach, Constant von: Biographisches Lexikon des Kaiserthums Osterreich 44 (Wien 1882)
- 『音楽大事典 I～VI』平凡社 (東京 一九八一～一九八三)

「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」のこと

「ルドルフ・ディットリヒ顕彰出版の会」事務局長

桑村益夫

私は間もなく八五歳になる一介のアマチュア・トランペット奏者です。二〇一四年の中頃、私の師匠、築地徹氏のレッスン室でふと手にした、日本とオーストリアの文化交流の歴史を記した、オーストリア大使館発行の『オーストリア・日本』と題する小冊子の「Tekona Marsch」と題したピアノ譜に目を奪われました。

年号が万葉集に由来する「令和」に代わり、改めて万葉集が注目されるようになりましたが、「手児奈^{てこな}」は千葉県市川市真間に伝わる伝説上の美女の名前で、万葉集に山部赤人や高橋虫麻呂が彼女の悲話を詠んだ和歌が載っています。私は東京の下町の生まれですが、戦火を避けて転校した真間小学校の隣に「手児奈」を祀る「手児奈霊神堂」があり、手児奈の伝説はよく聞かされていましたので、大いに興味をそそられ小冊子を読み、このピアノ曲を作曲したルドルフ・ディットリヒとの存在を初めて知りました。「手児奈」が実在したか否かは諸説ありますが、ここでは省略させていただきます。

ルドルフ・ディットリヒの偉業については、平澤博子博士が本書に記されているとおりですが、私は「手児奈マーチ」をぜひ蘇演させたいと考え、師匠の築地徹氏にウィーンの図書館でピアノ譜を探

人名索引

【ア行】

- 青山光子 (あおやま・みつこ
Coudenhove-Kalergi Mitsuko 1874
～1941) 136
- アルタリア、カール・アウグスト
Artaria, Karl August (1855～1919)
160
- 安藤幸 (あんどう・こう 1878～
1963) 72, 73, 78-80
- 伊澤修二 (いざわ・しゅうじ 1851
～1917) 48, 50, 52, 58, 60, 73, 75,
101, 102, 103, 112-119, 121, 130,
142, 187, 188
- 伊澤多喜男 (いざわ・たきお 1869
～1949) 116, 117
- 伊藤博文 (いとう・ひろぶみ 1841
～1909) 56
- 井上馨 (いのうえ・かおる 1835～
1915) 60
- ヴァインベルガー、カミロ
Weinberger, Camillo (生没年不詳)
95
- ヴァルター、ブルノ Walter, Bruno
(1876～1962) 159
- 上眞行 (うえ・さねみち 1851～
1937) 101, 108, 187, 188
- ヴェッツェラ、マリー・フォン
Vetsera, Marie von (1871～89) 55
- ヴェーバー、カール・マリア・フォ
ン Weber, Carl Maria von (1786～
1826) 58, 76, 108
- ヴェーバー、フランツ Weber,
Franz [宮廷音楽師] (生没年不詳)
163
- ヴェルディ、ジュゼッペ・フォ
ルトゥニオ・フランチェスコ
Verdi, Giuseppe Fortunio Francesco
(1813～1901) 40
- ヴォルフ、フーゴー Wolf, Hugo
(1860～1903) 27, 38, 40, 178
- 瓜生繁子 (うりゅう・しげこ 1862
～1928) 74
- エッケルト、フランツ Eckert,
Franz (1852～1916) 52, 53, 61,
127, 136, 137, 168
- エプシュタイン、ユリウス
Epstein, Julius (1832～1926) 168
- エミール、ワルトトイフェル
Émile Waldteufel (1837～1915) 84
- オッフエンバック、ジャック
Offenbach, Jacques (1819～80) 29

【カ行】

- 樺山資紀 (かばやま・すけのり
1837～1922) 117
- カロリーネ・ランマー Karoline
Lammer (生没年不詳) 33, 65
- 北村季晴 (きたむら・すえはる
1872～1931) 73

【著者略歴】

平澤 博子（ひらさわ・ひろこ）

秋田県秋田市に生まれる。1976年ウィーン国立音楽大学音楽教育ピアノ専攻卒業。1993年ウィーン国立大学精神科学部音楽学修士課程修了。1996年同大学哲学科博士課程修了、アウスツァイヒスング（特賞）受賞。哲学博士。1998年から東京音楽大学付属高等学校（音楽史・演奏研究）、東京音楽大学教職課程（リコーダー合奏）非常勤講師。2000年から2003年まで東京藝術大学非常勤講師（『東京芸術大学百年史』編集に携わる）。日本音楽教育学会会員。

ウィーンから日本へ 近代音楽の道を拓いた ルドルフ・ディトリヒ物語

2019年11月10日 初版第1刷印刷

2019年11月25日 初版第1刷発行

著 者 平澤博子

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>
振替口座 00160-1-155266

装幀／森田デザイン事務所

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1860-3 ©Hiroko, Hirasawa 2019 printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。